

アリゾナ 大隕石孔を訪ねて

2005.07.02 ~ 2005.07.08

フォーコーナースの州めぐり

今年、2005 年は、還暦の歳です。しかも、誕生日のつぎの日から工場がシャットダウンということで九日間の休みに入りました。これは絶好のチャンスと一大決心をしアメリカ中西部を見て歩くドライブ旅行に出かけました。

ネブラスカは起伏の少ない大平原の州で、高い山の標高も 5,000 フィート程度ですが、ロッキー山脈から西の地域は、平地の標高が 8000 フィートと言うところです。山は 14,000 フィートといますから、4,000 メートル級の山がずらりと並んでいるようなところです。

今回のドライブのコースは、そのロッキー山脈を超え、不毛の砂漠直前の台地をとおり、コロラド、ユタ、アリゾナ、そして、ニューメキシコの四つの州がひとつの点で接しているアメリカ大陸でもここしかないというところを尋ねました。そこから、もう一度、ユタ州を北に進み、アーチーズ国立公園、そして、景色のよいことで有名な I-70 を通り、しばらく西に進んでから、ユタ州の国立公園のキャピタル・リーフを通り、モニュメントバレーからアリゾナに入り、グランド・キャニオン、アリゾナの大隕石孔、そして、化石の森公園をみて、ニューメキシコの北を東に進み、再び、コロラドに帰ってくると言うコースです。

とにかく、山あり、谷あり、崖を下り、砂漠を横切り、岩山を潜り抜け、アメリカの大地のすばらしさを存分に味わうことのできた旅でした。

奇しくも還暦の記念にこうした貴重な経験をすることができたということは、これは、今までの人生を真面目にこつこつとやってきたその褒美と思い、我強く、曲がったことが嫌いで、理屈っぽく、ただ、がむしやらに自分の好きなことだ夢中になってやるという、すこし、世間様の常識からすれば、変わり者の部類に属する自分を支えてきてくれた家族をはじめ、多くの友達に対して感謝の気持ちでいっぱいです。

そんな気持ちから、このドライブの記録をビデオにしましたので、少しでもアメリカの自然を楽しんでいただければ幸いです。

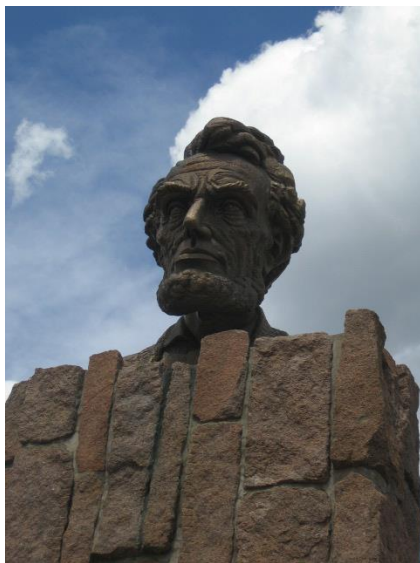
走行距離は、合計 3,808 マイル、6,100 ㌔の旅でした。

途中、尺八が乾燥で割れたり、パトカーにスピード違反で捕まり、国際免許のため無罪放免となったり、フロントガラスが割れたり、いろいろなことがあった変化にとんだドライブでした。

アリゾナ大隕石孔を尋ねて

ネブラスカ横切り 第一日目

工場がシャットダウンということで九日間の休暇となった。この休みを利用して久しぶりのドライブ、アメリカの自然満喫の旅にでることにした。目的地はアリゾナの大隕石孔である。とにかく、宇宙からのシグナルが残っている場所とあっては、自称ケンタウルス座から来た者としては見ておかないわけには行かない。



とにかく、できるだけデンバーの近くまで行く事になっているが、それでも、ただ、まっすぐコロラドにいったら時間も余るであろうし、また、折角のチャンス、できれば少しでも多く寄り道をしてということで、ちょっとだけワイオミングに入ることにした。I-80 をとにかく走り抜けネブラスカを横断しようというわけだ。そんなわけでもちよっとの無理を承知で、ワイオミングの州都チェイニーを超え、子供のころによくテレビで見たララミー牧場のララミーまで足を伸ばすことにした。I-80 はレキシントンからははしったことがあるが、それより西は初めてである。とにかくインターステーツは対向車がないし、ただ、ただ、まっすぐの道を走りまくりと言う感じ。

こうして、オガラーラの先でデンバーに行く 25 と別れ、ひたすら西に向かってはしる。このあたりから道の両脇はなだらかな丘陵地帯ということになるが、とにかく上り坂がだらだらと、また、延々と続く。ネブラスカでも標高の高いところというだけあって、一体どこまで上るかという感じ。やがて、ネブラスカからワイオミングに入る。ここに、レストエリアがあるが、なんと、そこはこの I-80 の最標高地とあった。8400 フィートというから、2500 メートルということになる。リンカーンの立派な胸像があり、本当にアメリカではリンカーンが国民に親しまれていることがよく分る。

これまた、とても素敵な州の議事堂

ワイオミングに入ると直ぐに州都のチェイニーに着く。ワイオミング全体でもあまり大きな都市は内容であるが、その中でもここはインターステーツが交差してい



こんな馬車で市内観光

るところでもあり、商業の中心的な都市ということから、かなりの人口がいるようだ。アメリカではどの州も州のできるだけ中心に近いところに州都を構えているようであるが、ここチェイニーはそういう点では、ほとんど州境に近いところにあり珍しいケースといえよう。高速を降りて、せっかくのことでもあるので街中をすこし見学した。直ぐに目についたのは駅舎のような建物。前がロータリーになっており、無料の駐車場もある。建物がゴシック調で、夢のあるユニークなものだった。そこに、多分市内観光用と思われるような馬車が走っている。車社会の中でも、市中の見学は馬車でするあたりは、少しでも環境を守ろうという姿勢が感じられ、いかにも合理的という印象であった。その建物に強い印象をうけ、このロータリーを一回りして、さあ、次の目的地に出発しようとしたとき、目



に飛び込んできたのが、これまた、今度はロマネスク調の立派な建物。あれこそ間違いなく州の議事堂と、早々に、その前の立派なアクセス道路に車を進める。ネブラスカの州都リンカーンにも立派な議事堂があるが、ここのものは少しヨーロッパ風のもので、見ていだけで楽しいものであった。土曜日ということでもあり、この道路にはほとんど車が走っておらず、道の真ん中で写真を撮し

りご満悦というところ。それにしてもアメリカではどこの州にもこうした立派な議事堂があるのは、いかにも国民が政治に関心をもっているかと言うことの現われでもあるような気がする。

チェイニーにも製油所があった。

以前にワイオミングの北の地方をドライブしたときにも、草原のあちこちに例の石油を汲み上げている首振りポンプを見たが、このあたりにもどうも石油がでるらしい。絶え間なく動き続けるあのポンプ。決して効率が良いとはいえないかもしれないが、それでも商業ベースでは石油がでるということで、本当にアメリカでは、どこに行ってもこのポンプがあり、アメリカそのものがたいへんな石油産出国であることを思い知らされる。おりしも、ガソリンの値段が高騰を続けている時だっただけに、アラスカや東シナ海、もちろん中東でもそうであるが、海外で石油探索をしたたかに進めているこの国の石油戦略が非常にたくみであることを思い知らされた。

突然、雨が。日がさしているんですが。

Sherman Mountains というインターステーツが少し小高い丘の上を走っていると、そ

の両脇に威容な形をした岩山が突然姿を現す。畑のなかに急に山があるような感じだ。これは、ここが嘗て火山のあったところというその証拠である。それこそ、干からびた鏡餅が幾つもかさなったような様子をしている。高速道路ではあるが、ちょっとした駐車場が作られていて、そこで一休みしながら、この不思議山のできた由来を勉強することができる。インターステーツでもこうして、気ままに止まり回りを楽しみながら旅を続けることができるように配慮されているのは、その土地に詳しい者でなくても簡単に、いろいろな知識を習得できるのでまことにありがたい話しである。

話しは変わるがアメリカの大地がどれだけ大きいかを説明するのはなかなか難しいことである。その大きさを感じることができるかどうかは分からないが、ちなみにこんな話はいかがであろうか。アメリカのネブラスカあたりは、回りをぐるりと眺め回すと、どの方角も地平線を確認することができる。そんなところで、天気の良いときに自分のいる場所でぐるりと回転すると、そこは天気が良く、日が差しているのに、ある地方だけにはどんよりとした黒い雲が掛かり、そこから筋を引くように黒い糸が垂れ下がっている情景をよく目にする。そこは間違いなく、雨が降っているのだ。それが、自分よりずっと遠いところになると、本当にその一角だけがそんな雨雲の柱を立てているのだ。そこまでは車で何時間かかるか分からないような遠くに、こうした雨雲を見るときには心配ないが、それがだんだん近くなると、よう注意。突然の雷ストームというものに巻き込まれる。ついさっきまでは日がさして、強い日差しに日焼けを心配しながら走っていたのに、この雨雲の中になると、まるで、フロントガラスが割れるのではないかも思われるくらいの激しい雨が降ってくる。雨ならまだ結構。時として、これがピンポン球くらいの雹になると、フロントガラスが割れることさえあるそう。ボンネットや車の屋根がへこむ程度の損害はまだまだ軽いとのことである。リンカーンで突然、雷がなり、雹がふり、工場の屋根に溜まった雹の重さで屋根が落ちて、工場の中が水浸しになったことを経験したばかりだったので、この雨雲にはとりわけ神経質になっている。

道路がよく整備されていて、まるですべるように静かに走る。

カンザス州からネブラスカに入ったときに経験したことは、とにかくネブラスカの道は整備が悪く、とりわけ、州が管理する高速道路はガタガタだ。それが、ワイオミングにきて同じことを経験した。歓迎のたて看板をみた途端に、走行している車がまるで道路を滑るように静かである。車のなかで聞くラジオの音が本当によく聞こえる。ワイオミングが豊かなのか、それとも、ネブラスカが貧困なのかは知らないが、とにかく、アメリカでは石油のどところは裕福だと理解している。ネブラスカではあまり石油を汲み上げているポンプを見ることはない。地層が極端に違うのか、あるいは、他に理由があるのかはわからないが、ワイオミングに石油が出、しかも、ネブラスカと同じように放牧ができ、また、観光地としても人気があるので、州全体が豊かなのかもしれない。

すばらしい地層に、思わず「ご馳走様」

これがまた、ララミーから 287 号線では、地質学の宝庫を思わせるような地形が続く。ネブラスカの周辺では、山が無いので、ワイオミングにきて初めてすこし高い山を見ることができた。その山がまた雨に侵食されて、奇怪な形をしている。まるで何かをモデルにして彫刻したような岩や、あるいは、気まぐれに削ったと思われるような形をした山がどこまでも続いている。何日かあとに、もっと凄い断層の地形を見ることがなかったならば、ここでみた、さまざまな地層を見せる山の断層はまことに見事というほかはなかったろう。とにかく、何万年もの間に積み上げられた地層が、これまた、何万年掛



いよいよコロラドへ。なるほど、ロッキーです。

かったかは分からないが、それが断層となって地表に出てきているのである。アメリカではいたるところに恐竜やさまざまな生物の化石が地表に出ているときいているが、なるほど、これなら容易に自分でも見つけ出すことができるという気がする。とにかく、その幾重にも重なった色とりどりの地層の紋様は、二つして同じものがないほどさまざまな形となって、見る人の目を楽しませてくれる。高等学校時代に物理をおそわった三田村先生という方が、よく「ハンマーを持って、地質学の調査に行く」といっていた。また、甥の工藤健一郎君は、地質の研究を専門にしていた。暇があれば、日本の山奥にはいつて何日でも石を砕いていたという話をした。時には、中国までもいったとのことである。かれらにここの地質の状況を話したなら、どれほど感激するのだろうかと思像しながら、何マイル、何マイルも続くこの地層に見守られながらのドライブとなった。

ワイオミングからコロラドに入ると、それまではどこまでも広がる大地の一角にひこつと溶岩が湧き出て、それが一つの山をつくりドライブする人の目を楽しませてくれるというものであったが、こんどは、この溶岩でできた岩山の連続である。その溶岩がここの大地をつくっているのだ。高速道路もその下は直ぐ溶岩という感じ。なるほど、これがロッキーかと思わず納得。しかし、本当のロッキーのものすごさはまだまだ序の口であった。それでも、この岩山をみているとなんとなく、溶岩でできた岩山の迫力が迫ってきて、これから先がますます楽しみになってきた。

Fall Rock に注意

崖が多いかぶさるように切り崩された道、岩がごろごろ、そして、道路脇に、「Fall Rock」と注意書きがされている。落石注意なのかと直ぐに理解できるが、あの大きな岩が落ちて

きたのでは逃げようがないではないか。しかも、十メートルや二十メートルが危険というわけではなく、切通しを何度曲がっても、安全のようなところはない。ついつい、どんなときに落石が起きやすいのかなと考え、地震もないところだから、おそらく大雨にでもなれば、石のひとつや二つは落ちてきてもしようがないな、と腹をくくり、逆に頭の上まで覆いかぶさってくる、この崖を切り崩したその下の道をそそくさと走り抜ける。夕方の日差しとともにこの崖のまわりがやや暗くなり、行く先のモーテルは大丈夫なのかという不安に駆られながらのドライブが続く。

ESTES PARK は良い所と聞いて

Laramie から Fort Collins という町に入り、I-25 まで足を伸ばすと、そこには Visitor



center がある。時間はすでに 6 時をまわっていたが、都合の良いことにこちらは山時間といって、ネブラスカより 1 時間ずれている。そんなわけで、危うくセーフ。ここでもボランティアと思われるお年寄りが三人で管理していて、コロラドを訪れる人に、これから行くところ、コロラドに来た目的などをきいて、大きな部屋一杯に陳列されているパンフレットの中から適当なものをさがしてくれる。たいへん助かるのだが、たどたどしい

エステスパークへのアクセス 岩の切通しが素晴らしい

英語を説明するより自分で探したほうが早い。いまの実力ではいたし方のないこと。最初は、Loveland というこの近くの町でモーテルを探すつもりでいたが、コロラドの山に行くといったら、是非、Estes Park に行けという。そこは、コロラド・ロッキーの麓の町でとても人気のあるところだとは聞いていたが、多分、飛び込みのモーテル探しは難しいと思い、すこしはなれた Loveland に泊まることにしていたのだが、あまりにも熱心に、ホテルはたくさんあるし、大丈夫というので、どうにかなるだろうと思い切り Estes Park まで行くことにした。すこし、時間が遅く、日はすでに西に傾いていたのだが。

このあたりから、だんだん山岳道路の様相になる。岩山が道の両脇に迫ってくる。谷川は断崖の下というほどではないが、狭い道路の直ぐ脇を流れている。遠くメキシコ湾まで流れていく水である。それほど時間はかからないであろうと思っていた Estes Park までの道は、次第に山の中の道となり、まわりにいえないような雰囲気。こんな山奥にホテルが一杯あるような町があるのかなとだんだん不安に駆られてくる。回りの景色はまことに見事なものであるが、写真をとるゆとりさえなくなってくる。もし宿がなければ、また、

元に戻らなくてはならないと覚悟をきめ、さらに車を進めると、ちらほら山小屋のような形式のモーターが見え始めた。ギクッとしたのは、たいしたモーターでもないと思ったようなところがすでに、No Vacant の札を下げている。「いけない。これは、まずいかな」と、ますます不安になってきた。途端、行き先が開け、これまたなんとも説明のしようがない山の中の観光地と化した Estes Park の町で出てきた。なんと、人々が道に溢れんばかりににぎわっている。町にはレストランやカフェ ばかりでなく、カジノや土産物屋、さらには、生活用品を売っているような店が、メインどおりの両脇にずらりと並んでいる。公園の駐車場には一杯の車が止まり、すでに、満車の状態。行き行き道路の脇にホテルが密集しているところがあるが、どこのホテルの駐車場も車が満杯の状態。これでは、ホテルどころかモーターの部屋もとれない。しかたなく、メインどおりを通り越し、山の取り付きに一番近い、町外れまで足を伸ばす。その先はもう山道というで仕方なく U-ターンをして引き返そうと思ったとき、「部屋、あり」の看板が目飛び込む。ここは「しめた。よし、駄目でもともと」と、腹をくくり、看板のモーターというより、コテージとロッジのある長期滞在者が利用するようなところに宿をもとめた。

Elkhorn Lodge にとまる。

このロッジ。相当歴史があるようで、なかなか古い趣のある宿。裏には馬小屋があり、家族で来て、長期に滞在できるようなコテージが山の斜面にそってたくさんあり、大勢の客が長いバケーションを楽しんでいた。高い部屋には泊まれないので、「一人だが、安い部屋はあるか」と聞いたら、何とか、別棟の部屋を確保してくれた。ところがこの部屋、いざ落ち着いて食事をしようとしたら、床が水浸し。風呂の配水管が漏れていて、直したばかりといっているが、実は修理ができていなかったのだ。結局、部屋を移り一段落。この宿、税込みで 75 ドルはすこし高かったが、まあ、観光地の宿泊では文句は言えない。

プールあり、パーティのできる大きな食堂あり、ロビーはノンビリ。裏には大きな馬小屋があり、ここでは乗馬ができる。夏休みの子供たちが、ここで毎日、乗馬をし、プールで泳ぎ、山に登り、何日も楽しんでリフレッシュしているのだろう。夏時間でそろそろ暗くなりかけた夕方、といっても疾うに 9 時は回っているのであるが、二十頭ぐらいの馬にの



これはまだ序の口です。

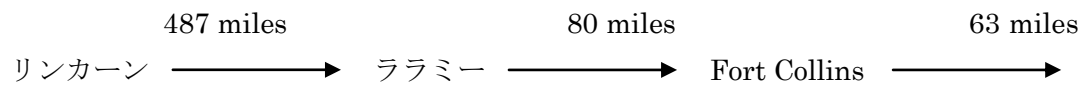
ったパーティが山から下ってきた。今日一日、こうして馬に揺られて山登りをしてきたの

だろう。

星空が楽しみだったが。

コロラドの山奥であるから、おそらく、たくさんの星が見えるのではないかと期待したが、回りが明るく、また、山間のロッジだったこともあり、結局、星はあまりみられず、この日はおとなしくベッドに入ることにした。

走行距離



Estes Park

合計 630 miles の長距離になりました。

とにかくロッキーなんですよ

二日目

July 3 2005

朝、できるだけ早く出発と決め、セントラル時間で 7:30 に宿をでる。入りロゲートでナショナルパークパスを買おうとしたら、まだ早すぎて、結局料金も徴収されず、トレイルに入る。このパス、なかなか便利なもので、これがあるとすべての国立公園の入場がパス



となり、一年間が有効となる。しかも、同じ車の同乗者まで適用されるという優れものである。これを買ってそれだが、料金をどうせ出口で徴収されるものと覚悟し、気分良く標高を稼ぐ。宿を出るときにあまりにも息苦しいのでホテルの主人に標高はと聞いたら 8,000 フィート何がしといていたから、二千数百メートル近くあるわけだ。道理で、どうも頭の調子もおかしい。

ロッキーのお出迎え

青い空、流れる雲よ、ロッキーよと、鼻唄も飛び出す、すこぶる眺望が開けた山岳ハイウェイ、その標高も自覚せずドライブを続けていると雪で化粧したロッキーの四千メートル級の山々が出迎えてくれる。

頂上付近で、雪が降る。

聞いてはいたが、暑い暑いと思ってここまできたのに、山頂当りで粉雪が舞ってきた。正直、これには少々度肝を抜かれた。車の中ではエアコンが効いているから温度設定をしておけば、厚くとも、寒くとも快適な温度に調整してくれるのであまり気にすることもなかったが、車から降りるとひんやりとした空気が腕をさする。数分もいたら震えが来た。やはり、雪が舞う寒さだ。早速、用意してきたジャケットを着たが、下は G パンだけなので到底この寒さには耐え切れない。あちこちに View Point があり、ロッキーの山を崖越しに 360° の展望を楽しめるが、100° の下界から一気に 3,000 メートルの高さに上ってきたので、高山散策はほどほどに車の中でドライブをしながらの見物とした。やはり車はありがたい。



ロッキーには雪化粧がよく似合う

このロッキーに自転車で挑戦するものがあるのだから、驚き。

標高が 3,000 メートルの高さをハイウェイが走っている。ここは、世界一高いところを走る舗装道路ハイウェイだ。車がガソリンで走るとはいえ、燃焼のための酸素が不足しているのではという心配がよぎるのは、運転している自分が時々息苦しくなるからだ。しかし、そんなことで驚いてはいられない。この標高にサイクリングで挑戦する奴がいる



ここが世界一高いハイウェイ

のだから驚き。いかにマウンテンバイクでのぼりの坂道も苦勞をせずに登れるとは言え、高さが違う。それでも、これにこのロッキー越えに挑戦しようというアメリカ人の意気込みには感心させられる。たいしたものだ。どんなことでも、人のやらないことに挑戦しようという、それこそヤンキー魂とでもいおうか、その意気込みが冷たい空気を貫いて伝わってくる。思わず窓から手を出して応援をしたくなる。こんな、度肝を抜くようなサイクリングを楽しんでいる光景をその後も何度かみた。

ヘラジカが戯れる。

心行くまで高地ドライブを堪能し、森林地帯まで下がってくると今度は、野生のヘラジカが出迎え。ガイドブックには、運がよければと書いてあったが、このあたりおそらくそのポイントなのであろう。超望遠のカメラをもったセミプロカメラマンがここぞというシャッターチャンスをうかがって、周りの目を気にせず夢中でレンズを覗き込んでいる。こちらにも、にわかカメラマンになったつもりで、ヘラジカの動きを捉える。悲しいかなそこは素人、あとで現像した写真にはヘラジカのお尻がアップで写っているというお粗末な一幕。尻しか見せないヘラジカか。道路に車が列をなして止まっているものだから、次々と好奇心が旺盛なアメリカ人が何事かと寄ってくる。道路はたちまち、この車でごったごたになってしまった。



リゾート地グランドレイク

Grand Lake あたり

コロラドロッキーの楽しみ方には、高い山を満喫するだけでなく、その麓に広がる広大な森林のなかで、乗馬を楽しんだり、トレッキングと言って草原を歩きまわったり、さらには、サイクリング、急流下り、などさまざま。勿論、レジャーボートでの水上スキー、釣りなどアメリカ人の余暇の楽しみ方は日本とひとスケール違う。このリゾートの中心地の一つがグランドレイク。とにかくその回りのどこのキャンプ場も、あるいは、オートキャンプ場もリゾート客で大賑わい。湖面には、水上スキーを楽しむ人が白波を立てて、我こそとその腕を披露している。緑の森林に囲まれ、透き通るほど綺麗なブルーの湖に戯れるのはこれ以上の贅沢はないといった感じ。思い出すのは、高校時代に卒業旅行の代わりに行った志賀高原での青春のひと時。

I-70 では、アメリカで初めてトンネルの中を走る。

コロラドを走る I-70 は、山間を縫って走る。この高速はアメリカの東西を結ぶ重要な運搬道路だからトラックの量がかなり多い。しかも、上り下りの坂道が多いので、40feet もあるトラックがうなりを立てて走る光景は迫力満点。でも、こうした長距離トラックの運転手はすこぶる行儀がよい。東洋のどこかの国のように、周りの車が避けて通るような運転はしない。75mile のスピード制限は必ず守っている(最も、この速度 120Km/Hr だから、これ以上スピードを出すと運転が危険なのかも知れない)し、また、乗用車に道をちゃんと譲ってくれる。かれらはとにかく、一日に数百マイルも運転するのだから、スピードを出して神経をすり減らすようなことはしないし、そんなに先を急がない。トラックが生活の糧であるから、違反でもして捕まったら、それこそ一生を台無しにするからだろう。

その、高速を走っていてアメリカのトンネルを始めて経験した。「アイゼンハワー記念トンネル」という名前がついている。例の大統領の功績をたたえてのものだ。傑作なのはこちらのトンネルは四角いんです。だから、まるで、長い部屋の中を車が走っているようだし、また、天井が広く感じられる。アメリカの本格的なトンネルを走ることができたのは非常に珍しい経験のようだ。なにしろ、トンネルなんて探してもなかなかないのだ。山があれば、そこは避けて通ればよいし、高ければ、いくらでも上っていけばよいのだ。なにもトンネルまでほっていくことはないと考えているのだろう。

91 号を Leadville へ

I-70 を降りて 91 号線を走ると Mt. Lincoln の麓に峠があり、ここがロッキー山脈の分水嶺になっている。この峠から先の水はアーカンサス川に流れ込み、オクラホマ州からアーカンサス州を横切り、延々と旅を続けてミシシッピー川に合流しメキシコ湾に注ぐ。まさにここが源流という感じの場所である。その川に沿ってある Leadville は交通の要所でもありなかなか風格のある町。アーカンサス川を溯ってきたヨーロッパの文化が多分フランス系のものだったからではないでしょうか。アメリカの町にはそうした町がなぜか多い。

そのアーカンサス川のほとりにあるいくつかのリゾート地ではとにかくやたらとスクールバスが駐車している。どこに行ってもあの黄色の独特の形をしたスクールバスは良く目立つ。この地に有名な大学があり、教育にとりわけ熱心な地域かと勘違いする位だ。が、よくよく考えてみたら、いまは夏休み。林間教室ということでアメリカの各地、といっても近隣の学校だろうが、子供たちが夏休みにラフティングを楽しみに来ているのだ。こちらの人はとにかく海が



メキシコ湾にまでいくアーカンソー川の源流

遠いので、こうした水遊びが大好きなようだ。大人も子供も歓声を上げながら、水しぶきを体いっぱい浴びて、夏のひと時を楽しんでいる。この川ぞいをしばらくドライブすると、場所によっては両側に崖が迫り、その下を清流が流れている。コロラド鉄道の景観をたのしむ観光列車の窓からみえるような光景を独り占め、まことに気分爽快。

Poncha Springs から Saguache へ

Poncha Pass という峠がある。ここの標高が 9010 フィートとある。この峠を越えると両



こんな岩がいつでも直ぐそこに見られます。

脇にコロラドの山を抱いて、延々と大平原が続く。これが、二千メートルのところにあるのかと疑いたくなるような世界だ。日本のスポーツ選手が高地トレーニングと称して、わざわざメキシコやアメリカに来て、耐久力の訓練をしているが、こちらの人はそこで生活することが毎日であるから、訓練もなにもない。ただ、平然と日々の運動を続けていれば自然と自分の耐力がつくということか。目的がなんであれ、わざわざ祖国を離

れてまでして訓練をすることに、国を代表して耐力を競う意味は一体どういう意味があるのだろうか、と再認識をした次第。その土地で育まれた体力で競技をし、負けても、それはそれで十分に意味のあることではないかと思うのだが。それこそ、そこに参加する意義があるような気がする。いかがなものだろうか。そんなことを考えながら運転できるのも道路が空いているからです。

Saguach から Gunnison へ

これも大平原の続きではあるが、すこし様相が違うのは、ところどころに岩山が見えること。そして、やがて道路はその岩山の中を突っ切るようになる。狭い切通しの両脇には数十メートルの岩がのしかかってくる。時々「Fall Rock 落石注意」の看板が出ている。ここで大きな岩が落下してきたのでは逃げようがない。実際に落ちてきたのではないかと思われるような岩が道の脇に無造作に鎮座しているから、これまた、緊張する一瞬だ。



今にも崩れそうな岩の塊。

Gunnison から Monterosa へ

Blue lake あたり、やや雲行きがおかしくなってきたが、突然雨が降ってきても、行く先あたりが白い雲であれば天気には心配ない。

Gunnison にはカレッジもあったが、よくもこんな田舎に人が集まるものだ。市民が何の抵抗もなく平然と生活しているのだが、ここの標高も 7,700 フィートとある。なんと、2,300 メートルではないか。このあたり今度は西に流れ、コロラドからユタ、そしてアリゾナをぬけ、何百マイルも流れ流れて太平洋に注いでいる。その間に岩を削り、谷を掘り、キャニオンを作っているのだから、まことに自然の力とはたいしたものだ。

Monterosa はなかなか落ち着いた町。風格がある。

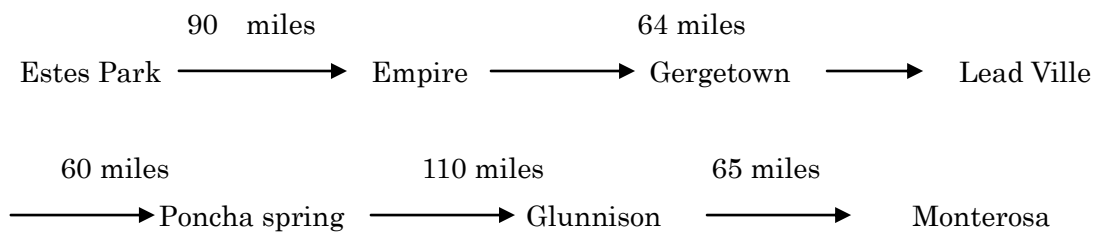
兎に角、岩山、大草原、かと思えば、延々と果てしない荒野、これには、一体この国ははどのような風に説明したら良いのやら迷ってしまうが、そんな、中に突然と町が出現するのだから、全く、こちらの人の世界観とはどんなものか教えてもらいたいものだ。人口が数万くらいしかないだろうと思われる町。隣の町までは、二十マイル以上はなれている。車で 30 分く



風格のあるモンテロゼの町

らいはかかる距離だ。そんなところで生活が成り立つのだから、こちらの人の生活のパターンも、一週間、二週間は世間から隔離されても大丈夫というような形になっているのではないか。食料の買出しに行けば、乗用車が一杯になるくらい買いだめをしているのは、リンカーンでも良く目にする。こちらのことはそう毎日町まで買い物に来ると言うわけには行かないだろうから、とにかく買い物はするにしても自給自足の様な生活をしているのではないかと思う。そんな **Monterose** でも、ここが街道筋であるからだろう、たくさんのモーターが並んでいた。今日は早立ちだったし、明日は、かなりの長距離の工程となるので、今日は早く寝ることにする。

二日目



走行距離

389 miles

山あり、崖あり、砂漠あり、そして、これこそロックの王様

三日目

ロッキーの分水嶺をこえ、川が太平洋に流れる領域に入った。この一瞬をルイス&クラークはどれほど感慨深く心にとどめただろうか。ミズーリ川を遡り、カヌーを担いで山越えした時代からすれば、今は、自動車で難なくこの偉業を成し遂げてしまうのだから、文明の利器とは恐ろしいものだ。

Montrose から Ouray へ

暫くは平坦な道を走る。Montrose で 50 号線と別れ、550 号線にはいる。道は次第に山道に変わる。すでにロッキーを越えているので平坦な道が続くのかと思ったら、Ouray という町を過ぎた途端に急激な上りとなり、やがて崖、崖、崖の道になる。Ouray というまちはその取り合いにできた、坂道の途中に粹な家が立ち並ぶ保養地のような感じの町で、学生たちが夏の合宿に来ているような雰囲気である。その町を眼下に見下ろすほど坂を上りきると今度は、岩山を切り崩したような道が続く。山側からは今にも落石がありそうな岩肌が迫る。細い二車線の道はのぼりが谷側になり、窓からはずっと下に溪流が流れているのがよく分かる。大きなキャビンをついたトレーラーなどはうっかりハンドル操作を誤れば、後輪が脱輪してしまいそうなほど急なカーブである。くわばら、くわばらとところで叫びながら、暫くは緊張の連続でハンドルを握る。やがて、その緊張が解けるほど昇ると、そこは、標高が 10,000 フィートを越す峠である。Red Mount Pass と呼ばれる地点で、谷の向こうに赤い山肌をむき出しにし、山肌に雪を抱いた峰が見える。Redcloud と呼ばれる 14,034 フィートの山には山頂あたりまで道が走っており、この道を使ってこの山で取れる鉱石を運びだしているようだ。その色からして鉄鉱石と思われるが、大きな山全体を露天掘りで掘っているのだから、全くアメリカにはこれだけの資源があるのかと思うと、まことにうらやましい限りである。



この山の脇の下の峠を越えて行きます。

このバスを過ぎると Silverton という町に入るが、ここも保養地としてかなりの賑わいを見せていた。山に囲まれてバレーのなかに町があるようなもので、そのなかを高速道路が走っている。あまりに平原が続くものだから、これで平地になるのかと思いきや、またしても のぼりが続く。そして、今度はさらに標高があがり 10,900 フィートの地点にある Molas Divide Pass、そして、Coal Bank Pass を超える。この Coal Bank というのがまた強烈な岩山で、まるで空に軍艦が浮かんでいるような様相をしている。大きな岩山がま

るで天からおろしたような形で山の上にどかと座っているのである。そして、その岩肌
は、これもまた見事な地層を楽しませてくれる。それこそ、この地層の重なりをみている
と数万年のときを一気に飛び越えて、いけそうな気になる。ここもおそらく、山の名前か
らして限りない石炭を埋蔵しているのでは無いかと思う。途中に炭鉱のようなものがあっ
たが、こちらの炭鉱はどこかの国と違い、一つのところでがむしゃらに彫りまくっている
ような様相はない。長い年月をかけてゆっくりゆっくりと、少しずつ掘り出しているよう
な感じだ。なにしろ、炭鉱よりも保養地としての雰囲気のほうがよほど目立つのだから。

ここから、山道をどんどん下るが、このあたりの保養地に向うのであろう乗用車やトレ
ーラーが次々と昇ってくる。そうしているうちに、これまた、これほどの道楽はないと思
うくらい Old car にのった連中が次々に上ってきた。松に Old Car の on parade といった
ところ。なにも、こんな山奥まで来なくてもとおもうのだが、この山を登りきるところに
彼らの自慢の種があるのかもしれない。派手な色をした車体をととても綺麗に磨き上げ、オ
ープンカーで風にマフラーを靡かせている光景は、さながら、映画的一幕を見ている感じ。

この高原をくだり切ると Durango という町につくが、ここの標高が 6,500 フィート、つ
まり、2,000 メートルであるから、いかにこちらでは、高地で平然と暮らしているかとい
うことである。車も息苦しいだろうが、まだまだ頑張っていたかなくてはと、尻をはたい
た次第。

このあたりに、原住民であるインディアンが崖をくりぬいた古い居住跡が、国立公園と
なっているが、今日の工程の先が長いこともありここでは省略せざるをえなかった。

発音がうまくできず、道を尋ねるときに意味が通じなかった Cortex 町から南に下る。目
的は、四つの州が境を接しているという地点、「Four Corners」といわれるところだ。

Four state corners

アメリカの地図を見ていて気のつくことは、とにかく州境が大胆にも直線で仕切られて
いることだ。合理的といおうか、大雑把といおうか、こんなことがよく出来るなどおも
うのだが、これもアメリカの土地の広さの象徴かもしれない。大きな川や山があれば納得が
いくが、ただのただっ広い草原や荒野なら、こうして直線にしておいたほうが、簡単明瞭、



誰も土地の境がどうのこうのということも
ないわけだから、これで十分ということにな
る。なるほどと納得。ところが、この地点が
また荒野の真ん中にある。もう直ぐという看
板が出てから、まだ数マイルは車を飛ばすは
め。この地点なかなか人気があるようで、す
れ違う車が多いのでこころ強いが、そうでな
ければ、こんなところで道にまよったらどう
しようもないというような四方八方何ものな

フォー・ステーツ・コーナー
四つの州を一跨ぎできます。

い荒野である。

観光客を相手にインディアンが土産ものを売っている。石の飾りものや、砂の絵、そのほかインディアンの工芸品など、どこの観光地に行っても、また、インディアンの居留地近くの店なら難なく手に入るようなものだが、歌い文句は、ここにしかないみやげ物だということ。驚いたことに、そのみやげ物やのある店が流していた音楽が、「支那の夜」である。これにはびっくりといおうか、おかしくて噴出しそうになったといおうか、まことにこっけいな話の一駒。

四つの州を股いて、記念写真を撮るとというのがここの地点でのパフォーマンス。なかには灼熱の太陽で暖められたその石のプレートの上に寝転んで、ポーズをとるものもいる。列を作り順番に、このアメリカでもこの一点だけというところを独り占めしての写真はなかなか貴重なものだ。そんな一般の客のまわりで、ハーレーのオートバイに乗った二十台ばかりのツーリング族が、猛烈な爆音をたてて、星条旗と四つの州の州旗が立つところをぐるりと巡りながら威勢を挙げている。この大地、あまりにも広いものだから、これくらいいしないとよい刺激にならない。こちらもついつい気を良くして声援を送れば、彼らから、グーのお礼がくる。

Hoven weep で引き返す。

このすこしこだわりのある地点は、それこそ荒涼とした荒地の広がる荒野の真ん中にある。この当り、どこに行くにもとにかく人里はなれた道を何マイルも走り抜けなければならない。行く先はずっと彼方の向こうにあるのだ。道によってはところどころ舗装のないところとなっている。次のアーチーズ公園に向うには、もう一度きた道に戻るのが無難と一端引きあげる。こうして、雑草が生えているだけはまだましという砂漠の中を延々と歩くことになる。途中、**Hovenweep National Monument** と書かれた地域があり、ここには先住民族の文化遺跡があるという。これを見学しながらのコースを選び、とりあえずこの **Visitor Center** に立ち寄る。ところが、ここで走り抜けられると思っていたコース、乗用車は通れないという。ここでも、またもまた予定外の道を引き返すことになる。収穫があったのは、ここの **Visitor Center** が **National Park Pass** を取り扱っていたこと。念願のパスが手にはいり、まずはご機嫌で引き返すことにする。**Blanding** という町に向うことになるが、とにかく車の数が少ない道路。農場の牛がここの主はわしだとばかりに行く手をさえぎる。広い農場でノンビリ暮らしている彼等に見れば、こちらは邪魔者以外の何者でもない。へんに気に障って突進でもされたらたいへんと、ここはおとなしく、最低速度に落として、まずはご機嫌をとりながらの通行となる。ハイウェイ 191 に出るとまた真っ直ぐな道路の両脇にモニュメントがあちこちに顔を見せる。

Church Rock で Honda Ohio Purchase の人と会う。

地図には何の気なしに観光地としての案内があるが、これは実物をみて流石に驚く。ま

るで、達磨さんのような格好をした岩がハイウェイの直ぐ脇に鎮座している。こういうところにはかならず **View Point** というがあるのでここで車を止めて、しばし記念写真。ところが、そこには三人ずれの先客がいた。シャッターを押してくれというので快く了解し、今度はこちらの写真もお願いします。一人旅では、三脚を出して、セルフで自分の写真を撮るが、これがなかなか手間がかかり面倒くさい。その点、人にお願ひすれば何のことはなく、自分の写真が取れるので、今回の旅行ではできるだけ他人様にお願ひして写真を取り、



Church Rock とにかく圧巻

また、いろいろな旅の話を伺うことにした。話によれば、この一行の一人はドイツから来ているという。「お前はどこからだ」というから、「日本だ」。「仕事は?」「自動車のシートメーカーに勤めている。自分のところは、オートバイの専門だが。」といったら、夫婦で旅行をしている主人のほうで、「テーエステックだろう。それなら、知っている。わしは、オハイオのホンダの購買の人間だ。」と来た。これには、びっくり。とにかく、オハイオからでは、ネブラスカの倍近くの距離がある。トライコンの休暇も、ホンダのシャットダウンに合わせてのことだから、こんなこともあって不思議ではない。相当な年配のひとで、ヒョットしたらかなりのお偉いさんかもしれないそこは、仕事を離れてのお楽しみでもあるし、わざわざ名前を聞くのも失礼と、御互い、

旅の安全を祈って分かれた。

Wilson Arch は見もの

珍しい形の岩に感激するにも増して、ホンダの購買の人と知り合いになれたなんていうのは、さまに旅先ではなにが起こるかわからないというハプニングのいたずらに感度する。そんな気持ちが覚めやらないうちに次々と、素晴らしい岩の芸術の道路の両脇に出現する。だ、アーチーズまで行かないのに、この素晴らしさである。中でも、**Wilson Arch** はまさにハイウェイの直ぐ横にあり、その前に車をとめれば、アーチの下というほど間近に見ることができる。メキシコ人の子供づれのトラック野郎がこのアーチの下で写真をとっている。あまりに近くて、全体が確認できないほどだ。とにかく、こうした岩の芸術は多すぎて、何時までたっても先に進まないという感じ。時間ははや、3時を過ぎている。まだ、肝心のターチーズ公園までは 30 マイル以上あることになっている。

Arches National Park

念願のアーチーズ公園についたのは、すでに夕方。といっても、時間的に夕方であって、山時間のここはまだ太陽が高い。公園の入り口で早速、ナチュラルパークパスを使う。快く歓迎してくれると、なにか、急に公園の係官に親しみを感じる。公園に入るには、急な坂道を登り、岩山をひとつ越さなくてはならないのであるが、突然に、また、岩山を素材にしたその素晴らしい造詣が目の前に開けると、その素晴らしさには、只々、参った!という言葉しかでてこない。アーチがあまりに有名で、そのほかの岩はあまり紹介されることがないが、とにかく、それ以外にも、岩でできた塔の連続、砂漠のなかの高層ビルを思わせる一枚岩の山、また、象のパレードと名前のついたあたりは、アーチがたくさんあり、ダブル・アーチ、目がねアーチ、さらには、エデンの園という一群の岩、これは、



まさに **Balance Rock**

二つの岩の塔が向かい合って立っており、その間に小さな塔がちょこんと見守られるよう



こんなアーチがあっち、こっちに

な形でたっているから、なるほど納得というもの。なんと言っても圧巻なのは、「バランス・ロック」といわれる、岩の塔の上に、バランスよく、もう一つの岩が乗っているもの。そして、肝心のアーチは、そこからさらに、近いもので数マイルも走ったところにある。一番奥のウォールアーチやパイナアーチまでは、十マイル以上、行かなくてはならない。この公園の広さにびっくりであるが、そこに行くまでにまだまだいろいろな見場所があり、飽きることはない。

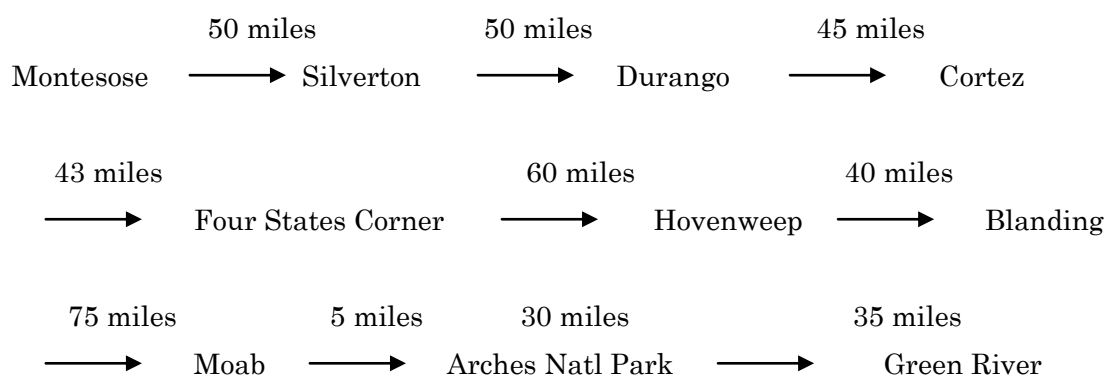
時間が時間だっただけに、デリケートアーチだけを見て、とりあえず今回は引き返すことにした。いずれにしても、こうしたナショナル公園クラスは、通りすぎるに鑑賞するような野暮なことはせず、じっくりとトレッキングを楽しみながら、一日過ごすような計画を立てないと申し訳ないような、もったいないような、そんな気分だ。

Green River に泊まる

後ろ髪を引かれるような思いを感じてアーチーズ公園をあとにする。とにかく今日の宿

はまだ決まっていない。しかも、ユタ州の真ん中を走る I-70 をできるだけ西の地点まで行きたい。なにしろ、明日は、グランドキャニオンの近くまで行かなくてはならない。ところが、このあたりインターステーツの通り道にもあまり大きな街がない。たまたま、見つけたのが **Green River** という町。ここには、何しろ多くのモーテルがあるというので、ひとまずここでモーテルを探すことにした。アメリカ生活の長い、会社の吉田くんが安くて綺麗なモーテルということで以前に話をしてくれたのが、**Motel6** だ。町に入る前に直ぐにこれがみつかったので、早々に一晩の宿を掛け合う。この **Green River** という町、本当になんでこんなモーテルがたくさんあるの、というくらい、見慣れたモーテルがずらりと並んでいる。そんなわけで飛込みではあるが、簡単にここに泊まることができた。さらに、気のいいことに、明日の宿はグランドキャニオンの近くになるので、モーテルが当然混んでいることが予測されると思い、ここから、フラグスタッフにあるモーテル 6 に予約を入れてもらうことにした。ところが、これがなかなかうまく行かない。理由は支払いがクレジットでないとできない。まだ、アメリカに来たばかりでは、なかなか、このクレジットを作ることができない。否、つくった後で、クレジットヒストリーという、支払が滞ることがないという証明を数ヶ月間の実績で示さなくてはならないからだ。なかなか面倒な話である。つつい、真面目にクレジットヒストリーを作って無かったので、こんなときにトラブルとなるわけだ。そこで、銀行の引き出し用のカードを示し、免許証を出し、さらに、セキュリティー番号で調査をし、やっとのことで予約をとることができた。これで、今夜はぐっすり眠ることができる。さあ、お休みなさい。

この日の工程



450 miles

足が竦む、凄い崖

アリゾナの大隕石孔を巡る旅

四日目

July 5 2005

Green River から I-70 に乗る。久しぶりのインターステーツで快適に飛ばす。周りは荒涼とした荒野という植物の生えていない山々がつづく。この道はインターステーツでも景色の良いところと紹介されているが、なんとこれがそうかと思うような風景しかない。と



こんな 山間をインターステーツが走る

ころどころにはえている僅かに草木がなければ、月か火星かという風景が続く。とにかく、鉱山町のボタ山が続いている感じだ。途中、Historic Memorial という場所で説明の看板をみて驚いた。なんとここはウランの出る鉱山があるらしい。今の若いひとには分らないかもしれないが、嘗てアメリカとソ連が核開発を競い合った冷戦時代にはとても重要なところであったらしい。そんな説明書きをよんで、「冷戦」なんていうことばも、

もはや死語になったかと、昔を懐かしく思い出した次第。そんなことを考えていたら、これが急に両脇が崖の切通しが延々と続く道になった。なるほど、これは、凄い景観だ。早朝ということもあり、道路はほとんど車が走っていない。少々はスピードを緩めても追突される心配がないので、高速道路の途中でも窓をあけてゆっくりと写真をとることができる。所々に View Point というレストエリアがある。ここではゆっくりと写真を撮ることができる。大型トレーラーを運転している夫婦を見かけた。こちらのトラックは兎に角大きいし、居住性も優れている。二人で荷物を運びながら、アメリカ全土を走り回っているのなかなか粋なものだと、ついつい羨ましくなった。



Siguard という町で I-70 と別れ、そこからは一気に南に下がる。地図

ここもやがて巨大なキャニオンになる



I-70 はこんな光景が延々とつづく。

るあたりから、すこし様相がかわってくる。また、何時までも見飽きることのない見事な崖に沿ったハイウェイとなる。似たような光景は、アーチーズでも堪能したがここもまた、それに劣らず立派な岩山が延延と続いている。その形が次々に変わるし、また、走っている間に見る角度が変わると、違った形に見えるから不思議だ。本当にその岩の一つ一つに名前をつけてやりたいが、

これでは、いくつ名前を用意してもたりないかもしれない。立派な岩には、Twin

Rocks, Chimney Rock, The Castle, Hickman Bridge, Capitol Dome などの名前がついているが、これも見る人の気持ちによるところが大きいかもしれない。この崖、説明によればこの地域、といっても 100 マイルにわたって、6500 万年前に大きな力で地層が褶曲し、たくさんのシワができ、その低いところに川ができ、これが山を削り、崖を作ったとのこと。ここでは、こうした芸術がなんと、20 マイル(32 Km)も続いているのだから、本当にどうなっているのといいたいくらいの大きさである。公園の中には、たくさんの素晴らしい景色を見るポイントがたくさんあり、アメリカ人たちは何日もかけて、それをトレイルして実りあるバケーションを費やす。その

によれば、100 マイルの間に 1 本しか高速を下りる道がないが、なんとこれが現実。この間、ガソリンスタンドもなければ、食料も補給できない。そんなドライブからやっとな解放され、ホットしたところである。大平原の道を快く走っていたが、このあたり、標高が 2000 メートル近くある。バレーを走ると緑が一杯だし、牛がノンビリ牧草を食べていたり、また、町に入れば農場もあり、そのあまりの広さに、ついつい、ここが高地であることを忘れてしまう。Loa という町を過ぎ



Loa から Torrey あたりの素晴らしいバレー



雷も遠慮します。こんな岩がゴロゴロ。

ためのガイドをかねた公園のパトロール隊員はほとんどがボランティアだ。まさに、Capitol Reef National Park は、ここも、もうひとつの Arches Park という感じ。自然がつくったまことに見事な岩山芸術。流石にアメリカは凄い。この岩山に囲まれて自然の力の偉大さを感じない者はいないだろう、と、感心しっぱなしのドライブが続く。しかし、そんなことで満足しているどころではなかった。

Hanksville から Cataract Canyon を越えて、Mexican Hat というところまではめばしい町もないので、ここでガソリンを補給。とにかく、こちらでは、ガソリントankが半分になったら、つぎの補給地点を考えておかないとえらいことになる。満タンであれば数百マイルは大丈夫だが、四分の一程度ではまったく補給できないような長距離の道を走らなくてはならないときには気が気ではなくなる。たとえ小さな町があったとしてもそこにガソリンスタンドがあるかどうかは行っ



CATARACT CANYON への入り口

て見なくては分らないというのが常識だ。そんな大草原のなかを進む。とにかく直線道路であるから、すうマイル先まで見通すことができるが、こんなところをこの暑さと乾きの下でサイクリングしているものがある。行けども行けども、ただの草原のなかを、どんな気持ちで自転車を漕いでいるのかと、他人ごとながら余分な心配をし、ついつい、クラクションを鳴らして声援をした。自転車での走行距離は一日、せいぜい百マイルくらいかと思うのだが、それにしてもこの大平原を走りきろうということを考えるだけでもたいしたものだと思う。その一方では、大きなレジャーボートを牽引し、家路に急ぐ車が多い。



WHITE CANYON にあるチムニーロック

Cataract Canyon White Canyon と続く。凄いアメリカの大地

単調な大草原をドライブしていると、突然、周りの景色が一変する。両脇に岩山が出現し、道が下り坂になった。何気なしに走っていたが、実はこの大草原の標高は 1,500 から 2,000 メートル以上いるところを走っていたのである。つまり、日本ではかなり高い山の上

をはしっていたと思えばよい。その道が **Cataract Canyon** にさしかかったのだ。ここは、このキャニオンのほんの一部を横切っているに過ぎないが、急激な坂を猛烈な勢いで下るようになる。もちろん崖にガードレールなどないから、勢いあまって、キャニオンの下の湖までダイビングなんていうこともありそうなカーブをいくつも超えてゆく。

面白いことに **Cataract Canyon** の地層は、まず、一番下に色の白い花崗岩があり、その上に、赤い色の何十もの層からなる堆積岩がある。そして、まだ新しい黒い砂岩がその上に重なっている。この **Cataract Canyon** のほうは、こうした、層の一番上の砂岩が削られてできた **Canyon** である。若いキャニオンであるので、その削られ方が鋭い。これに対して、**White Canyon** のほうは、一番下の層の花崗岩が削られた **Canyon** だから、低いところにできているが、これがまた、いかにも硬そうな岩で、こんな硬い層まで削る自然の雨の力の凄さを感じた。

途中、この **Canyon** にかかる橋を渡ったが、とにかく、恐る恐るのハンドルさばきである。何しろ底を流れる川までは百メートルは有りそうな崖にかけられているのだ。渡り終えたところにガードのない見晴らし台があり、慎重には慎重を重ねてではあるが、そこがまた、素人の浅ましさ、車の中なら安全ととんだ勘違いをして車を崖の先端まで進めて止め、ここで写真を撮る。



恋人岩とでも名前をつけたい **TWIN ROCK**



NATURAL BRIDGE PARK

くさんある。なかには、こけしが二つ並んだような岩があり、「**Twin Rock**」と説明があった。さしずめ、双子岩といったところか。「恋人岩」とでもしたほうがぴったりの印象であ

考えてみれば、車の中にいるからとて安全とは限らない。無意識に前進と後退を間違えれば、それこそ、車ごと百メートルはある崖にまっ逆さまである。この **Canyon** もまた広大なもので何十マイルと続いている。その中に、**Natural Bridge** という公園がある。自然にできた岩の **Arch** だ。折角ここまできて見ないわけには行かないとばかり、公園に入ったら、9マイルのドライブとのこと。とにかく、アメリカの公園の広さは、中途半端ではない。**Arch** だけでなく、いろいろな形をした岩がた

る。

しかし、本当の恐怖はまだその先にあった。灌木の樹海のなかをただひたすらまっすぐと走りぬけると、突然、制限速度が 65mile から 15mile に変わった。しかも、舗装なしで、スイッチバックありと書いてある。何のことかと一瞬戸惑った。そして、カーブを曲がった



強烈な「MOGI DUGWAY」。足が竦む

たその瞬間、今度は、顔からサーッと血の気が引くのを覚えた。なんと、そこは、これまで何度も見てきた Canyon の断崖の真上だ。世界が半分かけてしまったような崖を下るガードレールがない道。しかも、道は、この崖を U-ターンを繰り返しながら下るようになっている。このターンをするところでハンドルを切りそこなえば、たちまちあの世まで導いてくれる断崖の底だ。この崖下りは、とにかく、

Canyon の底が全貌できる道を下るのだから肝を冷やす。一つ目のカーブの

ところで三菱の車に乗った車が立ち往生している。多分、足が竦んでうまくスピードがコントロールできないのではないかな。とりわけオートマではエンジnbrakeを使う癖がなかなかつかないので、ドライブギアのシフトをしないとブレーキが掛らない。これを知らずに通常のドライブでこんな急坂を下ったのでは、ほんの僅かずつしか下ることができない。すこし行っはとまり、また、動いては、ブレーキを踏んで、車が前に進まない。こちらは先を急いでいることもあり、ここは注意に注意を重ね、失礼をして先に進むことに



何時まで見ていても飽きない MEXICAN HAT

した。それにしても、あの崖、あることを知っていたらなかなかこの道は通れないのではと思った。後で地図をみたら、ここは、「MOGI DUGWAY」という有名な難所で、10%の勾配、角度にして 6° であるが、砂利道で 2.2 マイル続く。特別な注意書きがあるから、やはり、相当有名な崖道であるようだ。驚いてしまう。とにかく、こちらにも慎重そのもので、運転技術がうまい、下手という問題ではなく、どれだ

い、下手という問題ではなく、どれだ

け慎重に、安全に走るかという問題である。やっと最後の U-ターンを終えたときにはついアクセルを踏む足に力が入ってしまうというわけ。そして、なんとなく、もう一度崖を見返りほっと胸をなでおろした。

土地の名前がメキシカンハットと言われるくらい、その岩は滑稽と言おうか、名前にぴったりの形をしている。それまでの緊張が一度に解けて、この岩の形を見せられたら、思わず噴出さずには要られない。崖を下り、バレーの道を走るとなるとつつい安心をしスピードがでる。景色が一変し、荒野のなかに、ところどころにあの独立した岩山が見えてくる。いよいよ、モニュメントバレーだ。

さまざまな独立岩の連続。なるほどこれがモニュメントバレーか。その光景を見て、まず納得である。すでにかかなりの時間になっていたのも、見る角度によっては岩山の影しか見えなかったが、暫く車を進めると、これが夕日に照らされて、実に見事な姿で歓迎してくれる。高さは不思議なくらいに一定でも、その形は、まことにさまざま。あるものは煙突のように細く、今にも倒れそうであるが、あるものは、薄い板を並べて立てた屏風のような形をしている。また、まるで大地がその上にあり、生活ができそうなもっと大きいものもある。ここは、時間があれば、ガイドつきで、高速から離れてドライブをすることができるようであるが、兎に角、この広さでは、どこに向って走っても切り



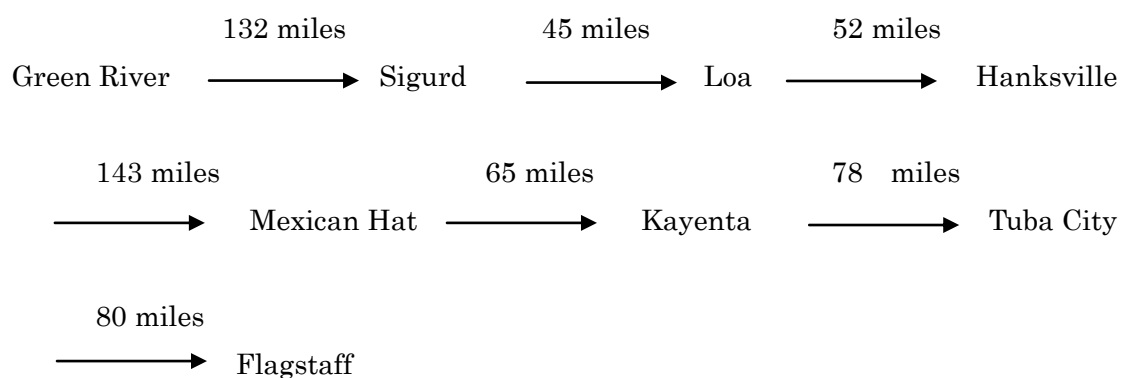
最高。モニュメントバレーは流石。

Flagstaff

この日の泊まりは高原の町、Flagstaff にした。グランドキャニオンへの玄関口の町だから、なかなか宿が取りにくいようだったので、前日のモーテルと同じチェーンの宿と決め、そこで予約をいれてもらった。余談であるが、こちらでは、電話やインターネットで簡単に予約を取れるが、問題は金をどうやって払うかである。勿論、現金でもよいが、予約ではそうはいかない。結局、クレジットで払うことになるのだが、こちらのクレジットは信用調査がされる。クレジットを遣い、しっかりと支払いをしているという実績がないと、そのクレジットは信用されない。そのため、予約もできないというのが現実。だから、クレジットが便利ではあるが、その信用の裏付けができない人、つまり、アメリカでの生活が短いひと、市民権のない人、銀行に金のない人、あるいは、金があっても支払いの悪い人、

あるいは、ルーズな人は、そのクレジットの実績がすべて記録されていて、これが、一瞬にして分かる仕組みになっており、悪い評価、レッテルを貼られてしまう。そうすると、これはもうお手上げで、こちらではまことに不自由な生活を強いられるというわけ。そんなこともあり、同じチェーン店のよしみで何とか宿を確保することができたが、それには、免許証、セキュリティーカード、それに、いま使っている現金引き出し用のカードをすべて調査され、漸く予約ができた次第である。そんな経緯もあったが、とにかく泊まる場所が決まっているので、精神的には随分ゆとりをもつことができた。この **Flagstaff**、流石にグランドキャニオンへのアクセスする街だけににぎやかな町だ。大学もあるようだし、何もないアリゾナにしては、閑静な住宅街が並んでいたし、町の高速道路も非常によく整備され、走っても気持ちがよく、なかなか洒落た町という印象をもった。案の定、宿はかなり混んでいるようであったが、予約を入れてもらったおかげで快適な一晚を過ごすことができた。なにしろ明日はいよいよクライマックスだ。

四日目 走行距離 584miles



流石、キャニオンの王様

アリゾナ大隕石孔を尋ねて

5日目

July 6 2005

とうとう、アリゾナまで着ました。目的は、グランド・キャニオン、アリゾナの大隕石孔、そして、化石の森公園。

グランド・キャニオンまでは、フラッグ・スタッフから、およそ一時間半かかる。途中、KAIBAB NATINAL FOREST を通るがここも、森林のなかをハイウェイが走り、朝の空気がおいしい。暫くするとこんどは見晴らす限りの草原になる。その向こうにグランド・キャニオンがある。なにしろ、キャニオンは COCONINO と呼ばれる標高が約 7,000 ft の台地を削ってできているのだから、遠くからではその存在は分らない。ただ、そのあたりに一面、靄がかすめ、その上に広く裾野を広げた独立峰が見える。VALLE というところでルート 64 に入る。



玩具のような Valle の土産物屋

ここに、インディアンの部落があり、キャニオンに向う人の心を躍らせてくれるようなとても明るい感じの土産物屋が並んでいる。ここを通り過ぎればいよいよグランド・キャニオンだ。ゲートで例のパスを提示すれば、あたかも「よく、いらっしゃいました」と笑顔で向えてくれる。パスを持つほど、アメリカの自然を楽しんでくれているのかという気持ちを持たせるほどこのパスが効力を発揮しているのか、それとも、もともと明るい性格で、誰にでも、親しみを込めて歓迎してくれているのかはわからないが、とにかく、その態度がすがすがしい。「こせこせすること」が、身に染み付いたどこかの国では考えられないことだ。ここから、ビジターセンターに向かい、近くの Mather Point でいよいよキャニオンとのご対面である。



これがグランド・キャニオンだあー。

サウスリムをドライブ。

いままで、いろいろなキャニオンを見てきたが、そのスケールの大きさはずば抜けている。流石だ。朝、早かったからか、あるいは、いつもそうであるかも知れないが、谷には霧が

かかっている。その下にどんな世界が広がっているのか想像するだけでも楽しい。すみきった青空と、グランド・キャニオンの谷を染めているやや赤茶けた岩の色が良く似合う。そこにグラデーションをかけたような霧がその奥行きを感じさせている。これがまた幻想的な印象を深める。あさまで 8 時前というのに観光客はかなりの数。といっても、ごたごたと所はなく、駐車場もゆったりとしている。キャニオンを見て、思わず歓声を上げている人々の声のなかにちらほら日本語も聞こえてくる。目前に展開するその自然がこの台地を素材にして削り込んでくれた芸術、いな、芸術以上のものは、ただ、想像を絶し、神秘的なものという表現が最も適しているような気がする。削られた岩の鋭どさ、空間の広がり、



グランド・ビューポイントあたり。

谷の深さ、岩の肩さと霧の優しさ、そのバランスは自然の法則に従っているに違いないが、ここには下手な説明はいらない。そんな光景を前にして望台の岩の上に一人座り、じっとこの幻想的な世界に思いを寄せている一人の女性がいた。人々がこの自然の姿に感嘆の声を発しているなかで、こうして自分ひとりの世界に入り、自然のひめたる力を無言で楽しむのも何か心憎い気がした。声をかけようにも、その隙がないといった感じだ。それとも、「グランド・キャニオンで、あなたを待っています。」なんていうことならこれは小説の種になるな、などと柄にもないことを考えたりした。

Mather Point からはサウスリムの東側をドライブ。西はここでのシャトルバスを利用するしかないし、また、時間がどれくらい掛かるかわからない。先の予定もあり、ここは自分で時間のよめる東側の View Point に向う。

どこの Vie Point でも、そこからの独特な素晴らしい展望を楽しむことができる。とにかく、崖の上を道路がはしっており、車を止めればそこから直ぐにキャニオンを楽しむことができる。直ぐ下をコロラド川が流れているはずだ。車で止まるたびに顔をあわせる夫婦がいた。2人でカメラをそれぞれ持ち、ときに構図の話をしているのか、被写体を選んでいいのか、議論をしている。会うたびに軽く会釈をしたが見るからに楽しそうだった。

キャニオンのめばしい谷、その中のピークや丘には、〇〇 temple とか、XX Mesa とか △△ Tower などとそれぞれ名前がついているが、実にさまざまな形のものがある。さぞかしぴったりの名前を付けたときには、名づけた人はしてやっつたりの気分を味わうことができたのではないかと思う。コロラドの自然を描いた画家 T. Moran にちなんでつけられたという Moran Point, サウスリムの中でも眺望が抜群といわれる Lipan Point、そして、下を流れるコロラド川がここで大きくカーブしており、断崖の向こうには遙かとおくまで広がる砂漠が見える Desert View で、存分にキャニオンを目の奥に焼き付ける。

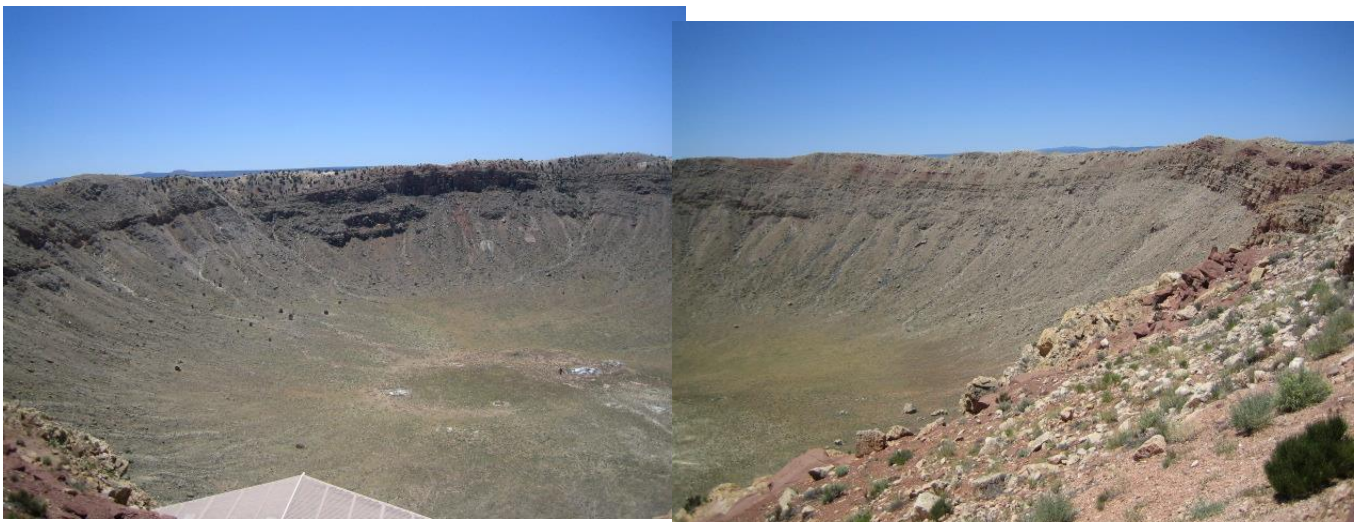
これで、グランド・キャニオンと別れをつげ、昨日とおったルート 89 に向う。**PAINTED DESERT** という平原を通る。キャニオンから 30 miles 近くあるが、なんと、ここにもミニキャニオンがある。コロラド川の支流のひとつトル・コロラドが削り取った溪谷だ。何万年かすれば、ここもまたグランド・キャニオンの一つとして素晴らしい景観をつくってくれるに違いない。



名もないベビー・キャニオン。ここもやがてグランド・キャニオンになるのだろう。

いよいよ大隕石孔だ

グランド・キャニオンの余韻を抱きながら、もう一度フラッグ・スタッフに戻る。とちゅう **Wupatki National Monument** という先住民の遺跡を見ようと立ち寄る。ここには、火山でできたクレーター、つまり、カルデラの陥没したクレーターもあるとのこと。車でいけるならと試みたが、ビジターセンターでトレイルに二時間も掛かるというので断念。気を取り直して、大隕石孔に向う。I-40 を **Meteor Center** を目指す。ガイドブックによれ



ついに、ご対面——ん。これがアリゾナの大隕石孔、別名「パリンジャー隕石孔」

ば、今から五万年前に、直径約 30 km の巨大な流れ星が地球に衝突したそう。つい最近でも木星にシューメーカー彗星が衝突したこともあり、天文学上のスケールからすれば決して珍しいことではない。その速度が 7 万キロメートルで地表に激突。その衝撃で周囲 160Km の動植物は一瞬にして消滅してといわれている。

やがて、インターステーツからやや離れたところに、このクレーターの岩陰が出現。

そのクレーターの淵には展望台があり、ここから全貌を眺めることができる。このクレーター、直径が 1,300 メートル、深さが 170 メートルとのこと。まずは、写真でその素晴らしさをご覧ください。



丁度、7月4日に NASA のビッグプロジェクトである「DEEP アリゾナの大隕石孔をバックに。ご満悦。

IMPACT」という、衛星から彗星に

爆発物を打ち込み、そこから噴出してくる地球外物質を観察して、この宇宙の誕生の謎を解き明かそうという計画が実行され、それが成功したこともあり、この隕石孔も随分注目されていたようで、かなり多くの子供連れの見学者で賑わっていた。

「とうとうやりました」、その気持ちを誰かに伝えたいという気で一杯。「アリゾナの風よ。この気持ちを世界中に運んでくれー。」

ここは、西経、111°、北緯 33° といったところでしょうか。

パトカーに捕まる。

アリゾナの隕石孔を見て、これで、ケンタウルス座から来たものとして大満足。ハンドルを握る手に、すこし鼻歌がでる。インターステーツの両脇は、これまたアリゾナの荒野がどこまでも広がっている。さあ、今日はこれで、あと「化石の森」に行き、これを楽しんだあと、どこまで走ろうかなどと考えて、ついつい、スピードを上げる。この高速、アメリカの東西を結ぶ、南の幹線であるだけにトラックがやたらと多い。こうしたトラックはほとんどが制限速度で走っている。こちらは、それではちと齒がゆい。そんな気持ちで、エイッ、ヤーとこれを追い越してゆく。大体、90 マイルくらいのスピードで追い抜くが、これだとすこし時間が掛かる。でも、それ以上のスピードは強風があったりすると危険なのでなかなか出せない。そんな追い越しを何回が繰り返していた時のこと。たまたま、追い越した後、直ぐにまた、走行車線に入り、80 マイルくらいに落としていればなんの問題はなかったのに、そのまま、追い越しスピードで暫く車の列の先頭を走っていた。運の悪いときは、まあ、よくよくタイミングが悪いもので、アッと気がついたときには、そこにパトカーが待ち構えていた。直ぐにスピードの出し過ぎとわかり、スピードを緩めたが、そのパトカー、にわかに動きだし、こちらの車線に向って走ってきて、直ぐ後ろについている。こちらは、もうスピードを出していないから、直ぐに追いつかれて、暫くその状態で走る。多分、車の番号を調べているのだろう。そして、すこし間をおいてから、サイレ

ンが「ピポッ、ピポッ」と鳴り出した。もはやこれまでと車を道の路肩に寄せる。「しまった。罰金か」と思い、ここは潔く、観念。

車が止まると、やおら近づいてきたポリスが、「免許証」を見せろという。こちらは、ネブラスカの免許を取ったばかりであつたが、ここは、「国際免許だ。」といって、パスポートと一緒に国際免許を提示する。暫く、その中を調べていたが、結局、この場合は、「ミスターズズキ、スピードの出し過ぎ。ここは 75 マイル。貴方は 90 マイルでした。気をつけてください」ということで、無罪放免となった。実は、この国際免許を出したのには、裏があるのだが、そこは、内緒。どうも、聞くところによれば、他州のものの交通違反は、罰金が免許証の発行された州に入るので、意外と寛容だとのこと。真偽の程は分かりませんが。兎に角、この場合は罰金もとられず、これで一件落着となりました。「有難や、有難や。」でした。

化石の森

が、そうは問屋がおろしてくれませんでした。まだ、その続きがありました。その前に化石の森の話です。この公園もかなりユニークなところなのでかなりの人気スポット。入り口で、例により愛想のよい係官が、ガイドブックをくれる。「石化したものを持ち出してはいけませんよ」と説明

しているのだが、「OK,OK」と返事をしたら、「どこから来た?」というので、「日本だ」と応えると、準備よく日本語のパンフレットがあるのでこれをあげるといふ。それによれば、こうした樹木が朽ちることなく化石化したのは、二億二千五百年も前に遡るといふ。樹木は、氾濫した川が運んできた土に埋もれ、その上に火山灰が積もり、酸化されることなく化石化し、それが、やがて水の浸食により上の土が削り取られ、地表に現われたとのことである。ここには、化石化した樹木のほかに **Painted Desert** と呼ばれる、実に色とりどりの地層が幾重にもせきそうした台地があり、それが侵食により削られ、見事に崖をなしている地域がある。トレッキングができるようになってはいるが、**V view Point** から眺めるその眺望も、これが同じ地球の姿かと思わせるようなインパクトを持っている。



化石化した古代の樹木。



Painted Desert

化石の森公園の南の入り口に土産物屋さんがある。ここで、パトカーに罰金を払ったつもりと、その記念にオープンタイを買う。実は、このオープンタイは、例のバットランドで買ったハットに紐がついておらず、風のある日には飛ばされてしまいそうなので、その対策として前々から考えていたもの。インディアンの手作りという代物があり、これを手に入れる。まずは、よい記念ができた。

Gallup に泊まる。

グランド・キャニオンの偉大な芸術に満足したし、パリンジャーの大隕石孔も期待通りの感激するものだったし、化石の森公園ではスピード違反無罪放免記念のオープンタイを買うこともできた。ところが I-40 では、スピード違反ばかりではなく、とんだトラブルが発生した。それは、この道路にトラックが多いことを前にも述べたが、そのトラックの直ぐ後ろを走っていたときのこと。スピードは、



New Mexico 歓迎の看板

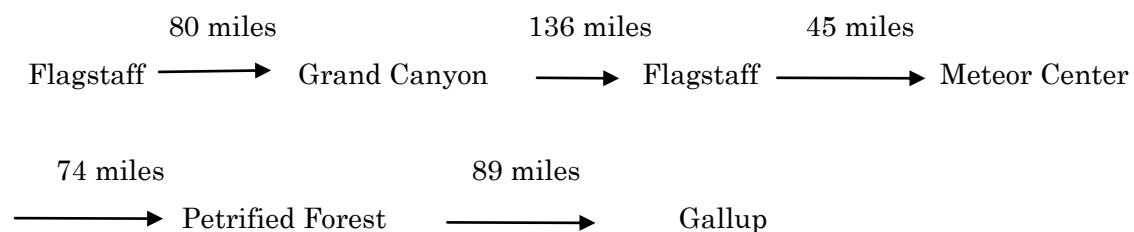
75 miles 程度であるが、これはキロに換算すれば、120 キロになる。このスピードで小石を跳ねられ、それがフロントガラスにあたり、突然、「パシッ。」ときた。しかも、最初はほんの小さな傷程度だったが、二度目のときは、傷の長さが 30mm にも達するかなり大きなものである。下手フロントガラスに力が掛かるとこの傷はどんどん成長してしまう可能性がある。前々から、アメリカでは小石をよく拾うと注意をされていたが、その災いが現実に自分にのしかかってくるとは想像だにしなかった。これだけ、悪いことが続くとここは減直しが必要である。ということで、この日は Farmington という町まで行く予定を急遽変更し、New Mexico に入ったばかりの町 Gallup で一泊することにした。

尺八が割れる

大隕石孔を見て、一応これでこのドライブ旅行の名目は十分立つ。いよいよこれからは帰途ということになる。そんな気持ちで、少々気持ちが浮いた状態。周りの景色を楽しみながら運転していたら、突然後部座席で「パーン」と言う音がした。「しまった。パンクか」と思ったが、車は順調に走っている。いったい何が起こったのかしばらくわからなかった。車がこんなところで故障したのでは、とてもネブラスカに辿り着けない。たいへんなことになる、しばらく恐る恐るの運転が続く。が、これといって不具合もないのでそのまま I-40 を飛ばす。しかし、これがとんだ災難の前触れだったとはあとあとまで気がつかなか

った。結局、次の日の宿に入り、久しぶりに尺八を吹こうと袋から出してびっくり。なんと、尺八が割れているではないか。あの音は竹が裂ける音だったわけだ。この日は、それとも気づかずの時間が続いたが、後々まで悔いののこる事件となった。実はこんなこともあろうかと尺八が割れるのを恐れ、温度の上がるトランクから出して後部座席までわざわざ移しておいたのに。とにかく、こちらの空気がこれほどまでに乾燥しているということ。車を運転していても喉が渇き、いくら水分を補給しても足りないほどだから、注意をしないといけないなとは思ってはいたのだが。それにしても、こんなことになるとは、「アメリカに、尺八は危険」ということをまざまざと知らされた事件。

5 日目



走行距離 420 miles でした。

もうひとつのモニュメントバレー

アリゾナの大隕石孔を尋ねる旅

六日目

July 7 2005

前日の工程では、Farmington という町までゆく予定であったが、パトカーに捕まるハブニングや小石でフロントガラスが割れるなどのトラブルがあったので無理をすることをやめ、この日は Gallup という町に泊まった。I-40 のニューメキシコに入って直ぐの町であるが、アリゾナとの州境を超えた途端に回りの様相が一変した。相変わらずの荒野であるが、ここが切通しになったようにところとあり、やたらと風が強く、その上突風が吹き、小さなレストエリアでさえ小さな竜巻ができるほどである。この町をさらに東に進めば、Albuquerque に着く。このあたり、ほとんどがメキシコ文化である。町の名前はスペイン語であるし、町のつくりから、町で働く人までもがちとアメリカとは違う



ここにもこんなモニュメントがある。その丘のところどころにポツンポツンと住宅がある。風をよける林もないし、また、緑を潤すクリークもない。驚いたことにこの荒野に突然、あのモニュメントバレーでみた、岩山がいくつか出現したのだ。確かに、州境をはさんでほとんど同じような地層からなりたっているであろう。たまたま数が少ないだけのことで、その景観はモニュメントバレーと全く同じだ。

Gallup から北に Shiprock という町に向う。このあたり、アリゾナとの州境をはさんで、ナバホインディアンの居住地となっている。しかし、ほとんどが荒野という感じでこんなところで生計を立てるには、一体どんな方法があるのかと疑いたくなるほど、なにもないところ。多分、ここに住んで近くの町まで働きに出かけるのかもしれないが、それにしてもこの荒野の凄まじさをなんと言うことだろうか。ただ、背丈の低い雑草が生える丘がどこまでも続いている



Farmington を過ぎ、Bloomfield あたりか ここにも石油がたくさん出るんです。崖のしたの平原を走る。この道にやたらと赤い小さな小旗をつけて飛ばしている小型のトラックが目につく。荷台には工具の箱や機械の修理をする設備を積んでいるようであ



ドライブを楽しませてくれる岩々。



道路脇のお花畑が嬉しい。

やがて高速道路はのぼりにかかり、山越えにかかる。この山が **San Juan**。あとで調べたら、**San Juan** とは、サンファンは、プエルトリコの首都。多分、スペイン人の聖者の名前ではないかと思う。このあたり、どこに行ってもこの名前が目につく。山並みに一筋白い煙が立ち上っているのが見える。どうも山火事のようなのだ。乾燥しているこの地域では絶えず山火事が起きているようで、コロラドではすでに数日も燃え続けている山火事が伝えられていた。お花畑があつたりとすこし心が慰められたような気分でしたら、突然こんなところにミニ・キャニオンが姿を現した。64 号線がこのキャニオンを横切るということで、その橋がひとつの名物になっている。近くにインディアンが露天をだしてみやげ物を

る。最初是一台、二台が同じような格好をして追いつ追われつのドライブであった。先を急いでいるようなので道をゆずり、こちらはゆっくりと景色を楽しみながら走っていると、また、後ろに同じようなくるまがついてくる。これも先に走らせてやる。ところが、暫くしたら、これこそ、あの諸葛孔明がつかった惑わしの術のような感じだが、また、色、形が同じで、しかも、小旗を立てた車がついてくる。どうも、このあたりでなにか作業をする車のようだ。そのうちこの車が草原のなかで石油の掘削をしているポンプのところで設備を操作している光景にでくわした。これで謎がとけた。このトラック、石油のポンプの管理をしているのだ。つまり、このあたりもかなりの石油の掘削がされていて、山のなかに大きな製油所もあり、また、プラントを建設する会社もあるほど。すれ違うめばしい車といえば、ほとんどがこの車というほど。ここが石油の産地というわけだ。



どこまで続くこの真っ直ぐな道。

売っている。高所は苦手だが、好奇心には勝てない。橋の脇に車を止めて、歩いて橋の中央まで行き、風で揺れるのもいとわず、底を流れる溪流を写真に納める。じっと覗き込んでみると、吸い込まれて飛び込んでしまいそうなので、早々に退却。



橋の上からキャニオンを望む。

ぎ話に出てくるような館が建っている。兎に角、色が派手だし、形が四角ではなく丸や、やたらと丸みを帯びた壁である。そんな家は何軒もあるので、このあたり一体の人がパフォーマンスでこんな面白い形の家を作っているのかとおもった。そのうち、町に近づくと、あの赤い山から採掘してきたと思われる岩を砕いている工場がある。驚いたことに町に入ると町のどの家も桃色の壁をした家ばかりである。しかも、レンガではなく、コンクリートのようでもあるし、また、漆喰のようでもある。面白いことには、この壁が兎に角真っ直ぐではなく、凸凹、曲線、真ん中が膨らんだり、それこそ、粘土で固めたようなうちばかりだ。町の公共施設もそうだし、レストランや町のスーパーまでも同じようなつくり。つまり、このあたりでは、木造や、レンガで造るよりも、この壁の材料でつくったものが一番安く、風土に合っているということなのだろう。これで、あの町はずれにあった赤い岩を砕いている工場が、ここの主役であることが直ぐにわかった。この土地で取れる建材をつくっていたのだ。

折角ここまできたのだから、この Taos の町でたまたま見つけた郵便局から日本に絵葉書を送る。さて、無事につくことやら。

町の名前からして、いかにもメキシコという感じの Taos に近づく。町外れにまるで



TAOS の町はどこか異様な感じ。



山道に掛かると直ぐに岩の屏風が出現。



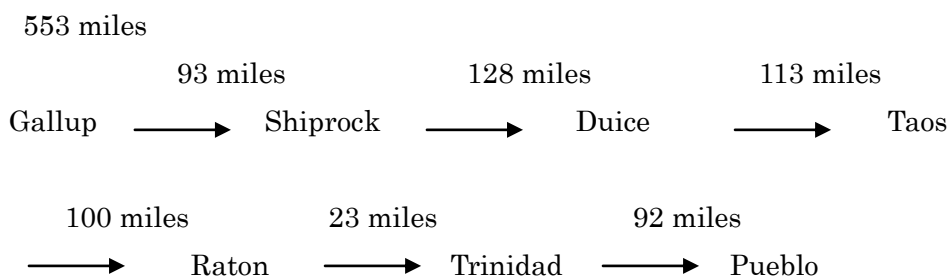
Taos からインターステーツまでの道は **Cimarron Canyon** と呼ばれている。ここにもまたキャニオンがある。コロラドロッキーの南の端というところである。崖が延々とつづき、ドライブを飽きさせない。ここを抜ければ草原であるが、見晴らしが利くところでは、この場所がはれていてもずっと先では雨が降っているのがよく分かる。例により、雨雲のしたに雨の柱が、あたかもその雨雲を支えているかのように立っているからである。

山道に掛かると直ぐに岩の屏風が出現。

る。その草原の彼方には、これまた優美な形をした頂が見える。たいして高い山とは思えないが、その裾野の広がりはいかにも悠然たるしたものがあり、アメリカの大地の広さを改めて感じさせてくれる。

Raton からインターステーツにのり、再びコロラドに入る。この日の宿は **Pueblo** という町。その名前は先住民族の家という意味。このあたりではどこにでもある街の名前である。

六日目 走行距離



帰ってきました。

アリゾナの大隕石孔を尋ねる旅 七日目

July 8 2005

再びロッキーの山を見に行くコースを選択したので、この日も早立ち。Pueblo からルート 119 を西に進む。Penrose という町で Fort Carson という高原のなかの道に入る。ここもなかなか閑静な高原道路という感じ。ただ、これまでのインパクトの強い Scenic Road と比べるとすこし大人しい。道は程なく Colorado Springs に出る。この町はコロラドでもデンバーに次ぐ大きな街で、なかなかしゃれた街だ。ただ、今回はここを通り過ぎるだけになってしまい、町を楽しむゆとりが無かった。次の訪問の機会を楽しみにしよう。



Denver

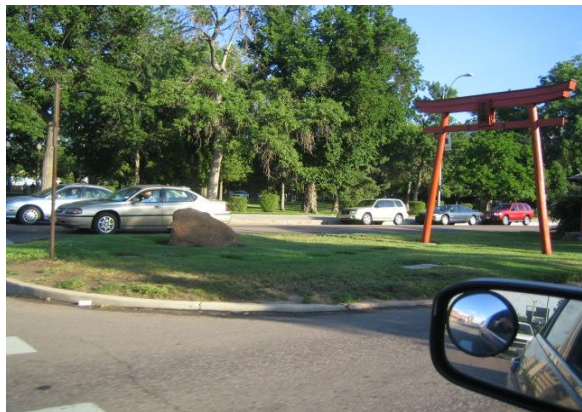
コロラドの州都だけあり、その規模が違

う。ここには、航空会社がハブにしているだけあり、インターステーツは I-70, I-25 が交差しているので、車の量が違う。アメリカに来て、これだけ込み合っている高速をはじめてみた。それでも、車は渋滞することなく、スムーズに流れているところが日本とは違う。何しろ斜線の数が違う。うっかりしていると出口を間違える。そんなわけで、大きい町でのドライブでは、自分の進む道を予めしっかりと頭の中に叩き込んでおくことが肝心だ。ただ、安心できるのは、通りこしても大体は周回道路となっているので、1 時間くらい走っていれば、また、元に戻れる。時間の余裕さえあればの話であるが・・・折角のチャ

ンスとここでは、高速を一端降りて、街中をドライブ。メイン通りと思われるが中央分離帯のある道路を走っていたら、突然、鳥居が出現。どんなわけでここに鳥居があるのか聞いてなかったので、これにはびっくりした。町中での徐行ということもあり、急遽カメラを取り出し、パチリ。とんだ、ハプニングである。

行く先は、I-70 に乗り、途中でルート 6 に入って、Central City 向うに道路である。ところが、このインターステーツがデンバーの中を走っている間はやたらとジャンクショ

Fort Carson のあたり



突然、鳥居が出現。これにはびっくり。

ンがあり、こちらはそのたびに出口を確認しなければならないので、後ろのトラックから迫られるは、出口の道に急にハンドルを切るわ、で冷や汗の連続。それでも無事、デンバーを過ぎると、急に山道になる。のぼりがあると思うと、猛烈な急坂のくだりとなる。大きなトレーラーではブレーキが利かなくなるのではと思うくらいの激しい勾配である。しかも、ルート 6 号に入るジャンクションは、この急な下り坂の中間にある。スピードは出ているし、また、車は谷の方に引っ張られるしで、ここをでるのにやっとの思いである。

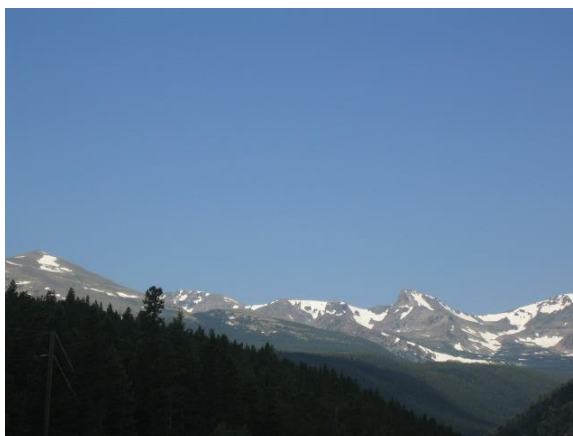
Peak to Peak

再び、あのコロラドロッキーの山々を間近に見ようと、漸く目的のルート 119 へ。そして、Peak to Peak といわれる観光道路に入る。名前から、また、標高 3,000 メートルくらいの山越えをするのかと思ったら、このコース、このロッキーの山々を遠くに見ながら、ドライブを楽しむというもの。残念ながら山なみを一つ超えなくてはなかなかロッキーが見えないような状態で、目的の白い雪を抱いた頂はなかなか見ることができなかった。それでも、時たま遠くにさすがはロッキーというような貫禄十分の山を望むことができたので、それなりに満足。やがて、懐かしい Estes Park の標識が出てきて、長いドライブ、コロラドを一周してきたという感が湧いてくる。

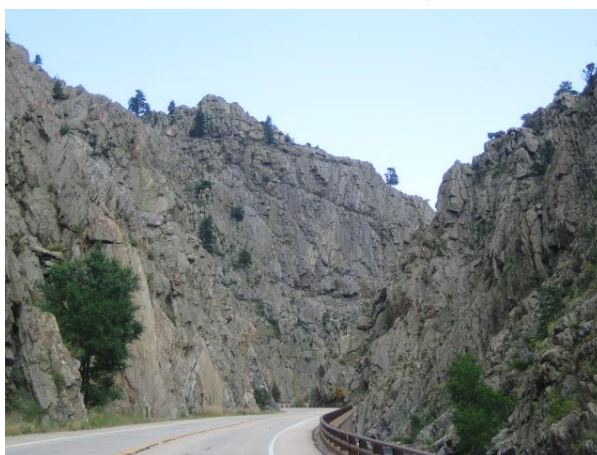
とその頃になり、山に雨雲が発生。遠くに雷の唸りがとどろいている。雨も降り出す。これでは、もう一度、あのコロラドの山に登るのは期待できない、ということで、ここから、山道を下り、Loveland に戻ることにした。そして、途中で一泊する予定を急遽変更し、遅くなくてもいいから、今日のうちにリンカ



Central City への入り口。



再び、コロラドロッキーを見る。



ルート 34 の西の終点。

ーンまで変えることに変更。

34 号線を Minden まで。

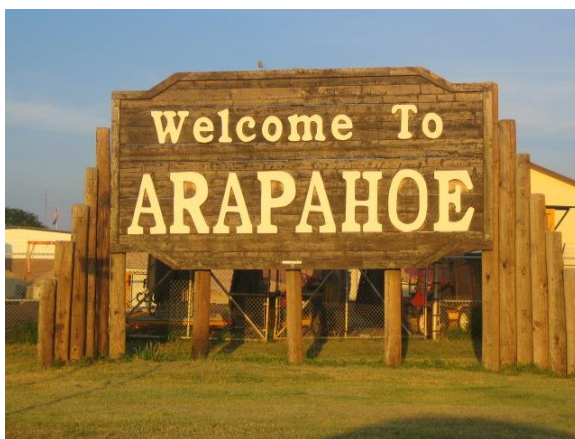
Fort Morgan から、I-76 にのれば、そのまま I-80 に、インターステーツが繋がっているの、比較的、楽にリンカーンに戻れると考えたが、ここは、折角のチャンス。かえる道にもなにかテーマがほしいということで、この Estes Park の町が 34 号線の西の終点となっている。この 34 号線は、ネブラスカにきて、最初にドライブした州の高速道路。アイオワから Plattsmouth でネブラスカに入り、リンカーンの町を横切り、I-80 の脇を真っ直ぐ西に走っている道路。その要所には、Seward, York, Grand Island という町が、嘗てのにぎわいを見せている。ここで、南に下り、Hastings、Minden へと繋がっている。この Minden までは、34 号線を辿ったことがあるということで、それなら、そこまで、34 号線を走っていけば、これで Lincoln から Estes Park まで走りぬいたことになる。というわけで、インターステーツをさけて、この州の高速を、その脇にある町を楽しみながらドライブするということに。

凄い入道雲

コロラドからネブラスカに入ると直ぐに、ネブラスカの北の地域に猛烈な入道雲がぐんぐんと成長しているのが見えた。毎日の天気予報で見ていると雲はコロラドのロッキーを越えたところで発生している。そして、サンドヒルといわれるネブラスカの北西部でぐんぐんと発達し、やがてサンダーストームをもたらす。どうしてここに入道雲が発生するのかはよく分からないが、おそらく、砂地で空地が温められて急上昇をするのではないかと思う。そこに近くを流れる川の水分が吸収されて、巨大な入道雲にな



州の高速道路では、こうした町並みが楽しみ。



どこの町もこんな歓迎の看板が迎えてくれる。
これを見るのも旅の楽しみの一つ



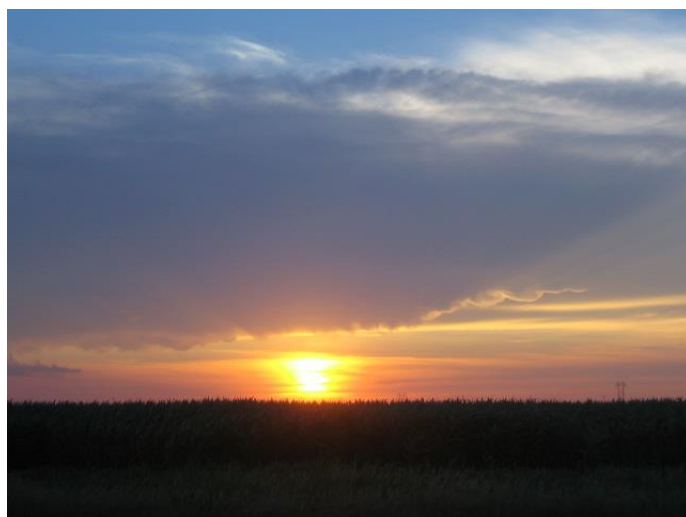
遥か彼方に発生した入道雲。

どうしてここに入道雲が発生するのかはよく分からないが、おそらく、砂地で空地が温められて急上昇をするのではないかと思う。そこに近くを流れる川の水分が吸収されて、巨大な入道雲にな

るのではと想像している。その雲が見る見る打ちに成長していくのがよくわかる。幸いなことに 34 号線はその地域とはすこし離れている。ただ、こちらのすこしは、150 マイル。250 キロ程度である。東京と浜松くらい離れている。これなら、サンダーストームになってもまずは大丈夫、というわけ。この入道雲、やがては大きく広がり、拡散していく様を楽しむことができた。

夕日を浴びて

ネブラスカに入り、Minden まではとにかく東に進む。アメリカのドライブで注意をしなければならないことは、とにかく、日の出も夕日も地平線まで太陽が頑張るから、日の出に東に向かうとき、夕方、西に向かうときには、まともに太陽が目に入る。なにしろ、こちらの高速道路は東西、南北、その方角どおりに出来ているから、よけいに気をつけないといけない。この日は、夕方、東に向かうドライブだから、太陽を背にうけて明るく照らされた大地を走るのだから、景色がくっきりとしてまことに気分爽快。あのアリュेशन



こんな夕日を浴びて、無事、ネブラスカに帰ってきました。

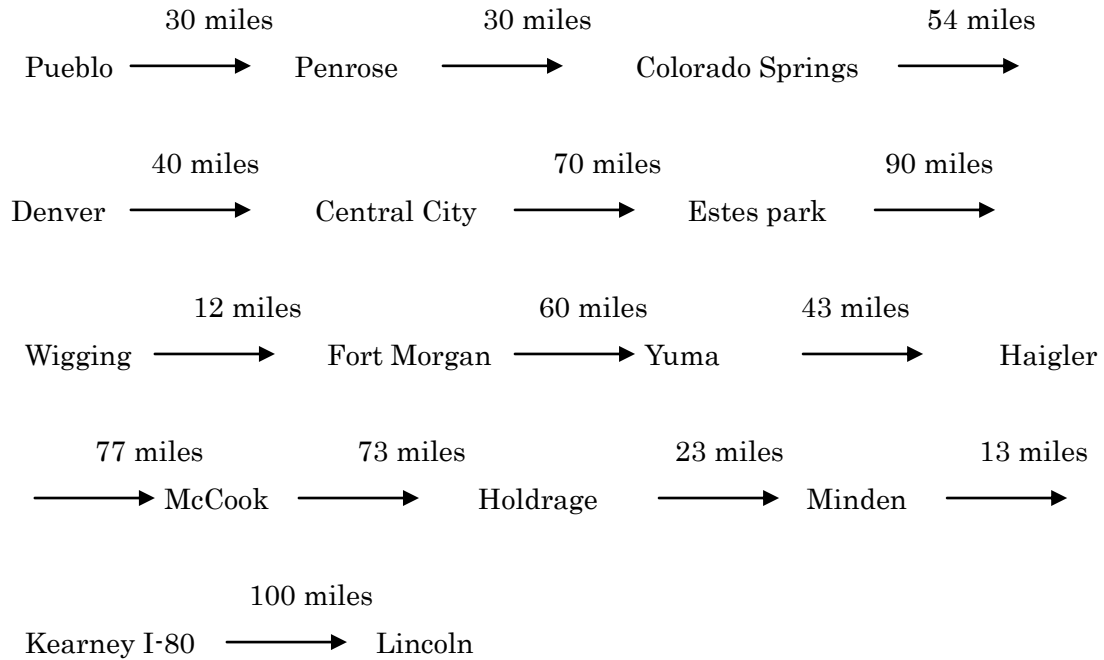
ンに航海したときに見た夕陽の雲が赤から橙へ、そして、空がブルーからダークブルーへ変ってゆくグラデーションの光景を期待して、時々、太陽を振り返る。海と違って、空気に汚れがあるためか、色の変化はそれほどのもでなかったが、やはり、鮮やかな赤の夕陽は見ごたえが十分。緯度が高いと大きく見えるという夕陽を注意して観測したが、残念ながらそれを確認する術がない。いつか、また、それを確認するような旅にでることにしよう。

こうして、無事、「アリゾナの大隕石孔を尋ねる旅」が終了しました。

還暦を迎えた誕生日の次の日、7 月 2 日に出発し、独立記念日でもあり Deep Impact」の衝撃の日、7 月 4 日は、モンテロゼからフォー・ステーツ・コーナー、アーチ国立公園を楽しみ、次の日にはスリル満点のドライブ、そして、グランド・キャニオンとアリゾナの大隕石孔を堪能し、ニューメキシコまで行ってくる大行軍でした。こうして、紀行文ができたのもたいへんよい記念になりました。

七日目 走行距離

757miles



このアリゾナドライブ 全走行距離 3783 miles でした。(6,053 Km)

1 日目	630 miles
2 日目	389 miles
3 日目	450 miles
4 日目	584 miles
5 日目	420 miles
6 日目	553 miles
7 日目	757 miles

これだけの距離、日本の地図では、
稚内、函館、東京、下関、鹿児島から沖縄までの直線を往復したことになります。ちなみに。